

2016「心の冒険・サマースクール」中高生クエストプログラム

ディレクター日誌（活動・子どもたちの様子）

期 日：平成28年8月17日（水）～25日（木）【8泊9日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家周辺の山域（山口市阿東）

参加者：県内の中学生・高校生（男子8名、女子8名）

1日目「開会行事・ダッフルシャッフル（荷物の詰め替え）・バックパッキング（荷物を背負っての移動）」

期 日：平成28年8月17日（水）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家～飯ヶ岳登山口 泊

テーマ：出会いの日（ふれあい体験）

【活動の様子】

8月17日、十種ヶ峰周辺に山間部特有の雲がかかり、強めの雨が降り始める中、10時半の開会式に向けて緊張した面持ちで徐々に子どもたちが集まってきた。

いよいよプログラムのスタートである。開会式で、今の自分のワクワクする気持ちをパーセンテージで尋ねると、多くの子が20～30%を示した。9日間という長いプログラムであるため、不安や心配を抱えている様子が伝わってきた。そこで、楽しさや幸せは自分の感じ方、考え方次第。コース中「大変だ」と感じることも自分が大きく変わるチャンスと捉えて、仲間とともに楽しむ気持ちを大事にしてほしいとエールを送った。

開会式が終わると、各班で行程に必要な荷物を大きなザックに詰めていくダッフルシャッフルを行う。山の中で安全に生活をするために、何をどんな順番で詰め込んでいくのか、説明を聞きながら時間をかけて丁寧にパッキングを進めていった。自分の着替えや寝袋などの個人装備に加え、テントやタープ、料理道具や食材などの共同装備等、全ての荷物を入れると10～20kgにもなる。準備中には、お互いに会話をしながら楽しそうに取り組む様子が見られた。キャンプの経験がある子も多く、荷造りが進むにつれて「よし、やるぞ!」という顔つきも多く見られるようになってきた。



昼食の十種ヶ峰むすび（山賊むすび）を食べたら、いよいよ出発。今年も昨年と同様、飯ヶ岳の登山口がプログラムのスタート地点となるので、そこまでは車で移動する。移動中、段々と民家が見えなくなり、山が深くなっていくと、「どこまで行くんだろう?」という不安を抱いた子もいたようだった。初日は飯ヶ岳登山口に向かう林道の途中から、登山口の駐車場までの約1.5kmを歩く。靴ひもの結び方やスパッツ（靴の中への小石や虫などの侵入を防ぐもの）の付け方、山での服装を確認したら、出発。まずは女子班、続いて男子班の順に出発した。30～40分程度の短い行程ではあるが、慣れない重さのザックを抱えているためか、黙々と目的地を目指して歩く様子が見られた。



女子班、男子班ともに、順調にテン場（宿泊する場所）である登山口駐車場に到着し、テントやタープの設営に取りかかる。テントによって仕組みが違いため、とまどう場面も見られたが、無事本日の寝る場所が出来上がった。次に行うのは夕食の準備。メニューはマカロニシチュー。山での生活は電気がないため、日の出とともに行動し、日の入り後できるだけ早く就寝できるように行動する。自然の中では、自然に逆ら

うことなく、できるだけ自然に合わせて生活することが基本となる。暗くなる前に夕食が済むように、インストラクターの指示を聞きながら、食事の準備を進めていた。最初のうちは、山での生活を身に付けるために、スタッフの指示や説明を聞くことが非常に大切である。基本をしっかり身に付けておくと、プログラムが進むにつれてスタッフの手を離れ、自分たちの手で主体的に行動することができるようになっていく。

このプログラムは、4つのフェーズからなり、最初の約3日間は、「トレーニングフェーズ」と呼ばれる。ここでは、グループの機能、責任、協力のあり方、自然の中での生活の技術等の習得を目指す。野外での生活への身体的適応ができるようにする時期でもあり、インストラクターは、参加者に直接指導と指示的指導を行い、山を歩くためのスキルだけでなく、グループにおけるコミュニケーションの取り方など、これからの生活に必要なトレーニングを行う。

夕食後は各班でミーティングを行う。キャンプに来た理由や目標等を班で共有し、次の日の予定を確認する。女子班・男子班ともに5時起床、7時出発という目標を立て、就寝準備を始める。8時半頃にはテントに入って就寝となったが、初日の夜ということもあり、なかなか寝付けないう子も多かったようである。明日からは、いよいよ山歩きのスタート。各班、どんなドラマが待っているのか、楽しみである。

2日目バックパッキング「飯ヶ岳ピークアタック（登山）」

期 日：平成28年8月18日（木）

場 所：飯ヶ岳登山口～飯ヶ岳ピークアタック～屋敷川林道奥 泊

テーマ：旅立ちの日（協力の体験）

【活動の様子】

2日目の朝を迎える。慣れない生活で、なかなか寝付けなかったようであるが、予定通りの5時に起床し、薄暗い中で行動を開始する。天気予報は、晴れ。最高気温は36度となり、熱中症要注意の日であった。いよいよ重い荷物を背負って山道を歩く時がやってきた。まずは、飯ヶ岳登山口から飯ヶ岳の山頂（937.1m）を目指し、宿泊地である屋敷川林道奥へ向かった。

女子班は7時半前、男子班は8時に元気に出発していった。日頃背負うことのないような重いザックを抱えた上に、いきなりの急登が始まる。歩き始めに大切なのは、とにかくゆっくり歩くことである。普段の歩きよりも意識してゆっくり進むことで、山道に体が馴染んでくると、疲れにくく同じペースで歩き続けることができる。このような山の歩き方の基本をインストラクターに教わりながら、一歩一歩踏みしめるようにして、山頂を目指す。また、地図とコンパス（方位磁針）の使い方も教わりながら、歩いている道の向き、斜度、周りの地形などから、現在位置と進行方向を知るためのトレーニングも積んでいく。



女子班は約2時間、男子は約1時間半をかけて飯ヶ岳山頂に到着した。山頂では、ファイナルツアーの目的地である十種ヶ峰を一望することができた。大きくプレーキがかかることもなく、ここまで大変順調な歩きである。時間的に早いため、両班ともに昼食はもう少し進んでから取ろうということになり、下山を始める。

女子班は12時に屋敷川入り口に到着し、昼食にする。ここで、トラブル発生。ザックの横につけていたブルーシートが1つなくなっていたのである。山頂を出発したときには確認しているので、下山中に紛失したことが分かった。昼食後、この後の行動をどうするのかミーティングを行う。一旦は、探しに戻ろうという決断をするが、まだ全員一致の意見

ではないとインストラクターが判断し、きちんと一人ひとりが自分の思いを伝え合った上で、みんなが納得できる答えを出すように促し、再度話し合った。約1時間半のステイで自分の思いを自分の言葉で伝え合った結果、やはり探しに戻ろうという決断をする。ここで、インストラクターはブルーシート（実は後ろを歩いていた男子班が拾っていた物を預かっていた）を出し、人に合わせて決めることと、自分の思いを伝え合った上で決めることは、同じグループとしての決定でも重みが違うことを伝えた。その後、テン場に向けて出発し、14時半頃目的地に到着した。早めの到着だったため、ディップ（川での水浴び）で心身のリフレッシュを図り、ゆとりをもって夕食（ラーメン）の準備に取りかかった。



一方、男子班は下山中、重い荷物を背負っている仲間や落ち込んでいる仲間に声をかけたり、手を引いたりする姿が見られ、1日目よりグループとしてのまとまりが感じられるようになった。しかし、12時半頃、昼食を取ろうとザックを下ろした屋敷川入り口で、紛失物があり、探した後にお互いに気をつけるべきことを話し合う時間をもつ。このことによって、子ども同士の関わりがそれまでより活発になったようである。男子班も15時にはテン場に到着し、ディップ後、夕食の準備に取りかかった。

初めての山歩きとなった2日目。両班ともに落とし物をきっかけに、お互いの関わり方やグループとして大切にしたいことを考えることができ、学びの多い行程となったようである。

3日目バックパッキング「弟見山ピークアタック（登山）」

期 日：平成28年8月19日（金）

場 所：屋敷川林道奥～弟見山ピークアタック～仏峠 泊

テーマ：発見の日（探求の意欲）

【活動の様子】

3日目の朝を迎えた。疲労がたまり朝の行動が辛くなってくる頃である。男子班は、昨日出発が遅れてしまった反省を踏まえ、今まで以上に動きがよくなっていたようだが、カウベル・笛の紛失のため、出発が予定時刻より遅れた。また、女子班は、疲労と3日目にしてようやくトイレにも行けるようになったこともあり、両班とも、7時出発の予定を大幅にオーバーし、その日の目的地の到着に影響を与えそうな朝になった。

天気予報は晴れ。しかし、午後に局地的に雷雨の可能性有ということだった。気温も高く、昨日に引き続き、熱中症への警戒も怠れない。この日の行程は、屋敷川の林道を奥までつめて稜線に抜け、弟見山の山頂を通過して、仏峠のテン場を目指す。道に迷う心配は少ないが、急登や急な下り坂がある上に、前日よりかなり長い道のりとなるため、厳しい行程となることが予想された。

しかし、両班ともに休憩を上手に取りながら、ストップすることなく歩き続けることができた。女子班は11時前に山頂着。下り道でも危ないところでお互いが声をかけ合いながらまとまって歩き、疲れの中にも満足感いっぱい顔で、14時過ぎに仏峠のテン場に到着した。この日もディップで、心身をリフレッシュすることができた。



男子班は、休憩が多くなってしまいうこともあったが、歩くときにはしっかり歩くことができ、出発時間の遅れ

があったにもかかわらず14時半過ぎには仏峠に到着した。残念ながら、到着のタイミングで雷雨に見舞われディップはできなかったが、翌日に備えて夕食（この日はオートミール）、ミーティングを済ませ、早めに休むことができた。

明日はいよいよ前半のクライマックス、ここまでで最も険しい行程を歩くこととなる。両班ともに歩きはしっかりとしているので、朝の出発時刻が今まで以上に大切になる。自分たちにとって最大限のチャレンジをするため、当初予定にはなかった高岳ピークアタックもルートを選択肢に加わった。どんなドラマが待っているのか翌日が待ち遠しい夜となった。

4日目バックパッキング「三ツヶ峰ピークアタック（登山）」

期 日：平成28年8月20日（土）

場 所：仏峠～三ツ頭ピークアタック～桐ヶ峠（～高岳）～クォーツバレー 泊

テーマ：挑戦の日（困難の克服）

【活動の様子】

4日目は、3日間のトレーニング期間から子どもたちが主体的に動いていく期間に少しずつ移行していき、それまでにない様々な体験をする時期である。「エキスペディションフェーズ」と呼ばれ、グループ内には、強い信頼関係ができれば始める反面、衝突が発生しやすい時期でもある。インストラクターは行動の決定の多くを参加者に任せ始め、非指示的なさりげない支援を行う。インストラクターに教えてもらった山道の歩き方やテント等の設営・撤収なども、徐々に自分たちの判断で行っていく。また、ファイナルツアー（最終章）に向けて、グループをつくっていく期間でもある。

今日は三ツ頭（969.4m）を目標の一つとしての活動開始となった。仏峠から桐ヶ峠までは、島根県との境界の稜線を歩くルートである。三ツ頭までの登りが一番の難所である。ピークに到達すれば、最終日に目指す十種ヶ峠が北方向に見える。さらに女子班は、桐ヶ峠到着の時刻次第で高岳へのピークアタックも狙おうと考えており、男子班も桐ヶ峠で話し合っとうするか決める予定としていた。

女子班は、5時に起床し、予定通り7時に出発することができた。自分たちを待っている大きな挑戦にワクワクした表情で登り始めていった。お互いに励まし合いながらどんどん歩みを進め、あっという間に三ツ頭のピークをとり、13時までの到着を目標としていた桐ヶ峠に11時半過ぎに到着した。昼食をとり、このまま高岳へのピークアタックを開始するものと思われたとき、インストラクターが言葉を投げかけた。「何のために高岳に登るの?」、「本当に全員に登りたいと心から思っているの?」。昨夜、高岳アタックを決めたときに、不安を感じている子がいることを見抜き、ここでその子の思いを取り上げることがグループの成長につながると考えての投げかけである。子どもたちは、ミーティングを通して、大多数の意見でグループの方向が決まり、本当の意味で一人ひとりの気持ちに目を向けていなかったことを振り返り、その子の不安に寄り添おうとし始めた。話し合ううちに、登りに不安を抱え「行きたくない」と感じていた子も、周りの励ましやサポートの提案を受け入れ、



「よし、行こう」という気持ちに変わっていった。こうして、1時間半余りの滞在になったが、一人ひとりが「みんなで登りたい」という意思を確認し、桐ヶ峠にザックを置いてのピークアタックを開始した。その後、14時半前に高岳の山頂に到着した。下山し、テン場到着は18時近くになった。みんなで決めた高岳アタックだったが、その後の下りで疲れもあり、声のかけ合いも少なくなって全体としてモチベーションが下がっていったようである。夜のミーティングで、「前半は楽しく歩けたけど、後半は気持ちが下がった」、「やはりみんなで声をかけ合わないと楽しくなくなる」、「自分たちの荷物は最後まで持って歩かないと達成感が得られないことを実感した」というような意見が出た。チャレンジを経て浮き沈みを経験し、次へつながる学びとなったという意味で、女子班にとって飛躍の1日となったといえる。

男子班は、5時に起床したものの、今度は軍手の紛失のため、出発は1時間程度遅れて8時前となった。その後の歩きは極めて速く、三ツ頭を越え、桐ヶ峠到着は12時であった。そこで、昼食をとりながら高岳へのピークアタックをするかどうかについてミーティング。約1時間半話し合った結果、登頂はせずにクォーツバレー（高岳の登山口に向かう林道周辺の森）への下山をすることを決断した。平成25年の豪雨災害で登山道が削られたため、いくつか危険箇所があるが、そこを安全に乗り越え、最後にだらだらと続く長い下り坂でも班でまとまって歩き切った。疲れの中にも「やりきったぞ」という達成感が感じられる表情で、15時半前のテン場着となった。到着早々に「キュウリがほしい」とのリクエスト。スタッフに習ったキュウリの塩昆布漬けなどのメニューが大ヒットで、早速自分たちでも作ってみたいとのことであった。残念ながら追加の食材はないため、翌日の配給を楽しみに待つように伝えた。しかし、食欲旺盛である。4日目にしてこれだけ元気があるのはたいしたものである。好天続きのため、十分な水量はなかったがディップを済ませ、夕食の釜飯作りに取りかかった。

明日はソロ。これまでとは、全く異なる活動をする1日となるだけに、各班にどんな変化が見られるか楽しみである。



5日目 日中ソロ

期 日：平成28年8月21日（日）

場 所：ソロサイト（クォーツバレー）～クォーツバレー 泊

テーマ：思索の日（克己と反省）

【活動の様子】

ソロはそれまでの「動」に対して「静」のプログラムである。子どもたちにとって、疲れた体と心を休める時間であるとともに、「自分」や「他人」、「それまでの出来事」を見つめ、自分を振り返る貴重な時間である。子どもたちはここで、家族からの手紙をインストラクターから受け取る。手紙を読んだりその手紙に返事を書いたり、これまでの自分を振り返って日記を書いたり各自が思い思いの時間の過ごし方をしていた。ソロに入ると夕方まで1人で静かに過ごす。ソロサイトで子どもたちが動くことができる範囲は、自分で設置したソロトップ（小さなタープ）下の半径約2mだけである。



女子班は、5時に起床した後、昨日できなかったディップをしてから、7時半頃のソロ入りとなった。17時のソロ明け後は、フルーツパーティーである。丸1日しゃべれなかった分、仲間との会話も弾んだようである。夜のミーティングでは、「苦しい時こそ声をかけ合うことを大切にしたい」という思いを確認した上で、「なんと声をかけたらいいかわからない」、「十分がんばっているのに、さらにはがんばれと言うのはちょっと違う気がする」などと、本音を出し合っていた。その上で、「あげたこ」（明るく、元気に、楽しく、声かけ）というキーワードを生み出し、この言葉をかけ合おうということを決めたようである。また、前の日に全員がすっきりとした気持ちで終われなかった高岳ピークアタックに再度挑戦するかどうかについては、「自分たちが目指す歩きは高岳に行かなければできないというものではないので、前に進みながら目標にチャレンジしたい」という意見が出され、決まった行程を消化するのではなく、日々自分たちの目標に向かうチャレンジを大切にしたいという思いが感じられた。

男子班は、5時に起床した後、6時半にはソロ入りをした。大半を寝て過ごす子が多かったようである。途中、インストラクターが見回った際にはあまり元気がない様子が見られる子もいたようだが、16時半のソロ明けでは元気いっぱいの様子だった。フルーツパーティーでは、食べきれないほどのフルーツを前に大変な盛り上がりが見られたようである。夜のミーティングでは、これまでの行程を振り返り、「人に頼る」や「見ているだけの時間を減らす」、「声をかけ合う」、「早く終わった人が手伝う」など、グループとして心がけたい行動が具体的に話し合われた。また、朝の出発時刻がいつも遅れてしまう問題に向き合い、まずは出発の目標を達成することがグループとしての大きな課題であることを確認していた。遅れる原因として、いつも何かがなくなることが挙げられ、装備の管理について最大限に注意を払おうということで共通理解を図っていた。7時出発を実現できるかどうか、正念場である。



ソロを挟み、プログラムの後半に向けて、各班で大事にしていきたいことを確かめることができたようである。翌日からは、いよいよグループがメンバーの力で歩みを進めていく段階に入っていく。

6日目バックパッキング「グループツアー」

期 日：平成28年8月22日（月）

場 所：ウォーツバレー～白井トンネル～上宇津根奥 泊

テーマ：冒険の日（責任と信頼）

【活動の様子】

6日目は、ファイナルツアーを意識しての活動となる。ファイナル・エクスペディション・フェーズと呼ばれ、インストラクターの手を借りずに、グループだけで目的地を目指してチャレンジする。生活や活動の全てを自分たちで話し合い、決定し、行動していくことになる。グループで困難を克服するため、それだけ大きな成功体験を味わうことができる。そして、仲間に対する信頼も揺るぎないものになる。インストラクターは、翌日の十種ヶ峰ピークアタックに向けて、安全に関する必要最低限のことだけ直接的な指示を行い、徐々に活動を子どもたちに任せていく。目を離さず、近過ぎず離れ過ぎず、子どもたちの安全が把握できる適当な距離を保って、見守っていく。子供たちは、これまでインストラクターから教わってきたことをもとに、自分たちで協力し合って活動を展開していく。

今日も天気予報は晴れ。気温もピークは越えたもののまだまだ熱中症への警戒は必要で

ある。この日のルートは、クォーツバレーを出発し、ロード（道路）を通過して白井トンネルに向かい、そこから山に入る。谷筋に沿って道無き道を県境である稜線まで上がった後、西に移動、上宇津根奥のテング場を目指すこととなる。確かな登山道があるわけではないので、地図とコンパスを頼りに地形を読みながら進む必要がある。メンバー全員で現在地を確認したり、ルートを探ったりと、これまで以上にグループの力が試される行程でもある。

女子班は、昨夜遅くまでミーティングをしていたため、起床を5時半に遅らせていた。その後の行動は早く、パッキングもスムーズで、目標の7時を少しだけ過ぎての出発となった。順調なスタートである。8時頃には国道9号線を横断し、徳佐の田園地帯へ入った。9時半には白井トンネル奥の山に入ってしまった。夜のミーティングで、メンバーの誰もが「今日はいい歩きだった」と評価した通り、8人がまとまり、声をかけて励まし合い、楽しみながら歩くことができたようである。



途中、どの方向に向かうべきか迷う場面もあったようだが、インストラクターのヒントも得ながら、自分たちで一歩一歩着実に歩みを進めていった。15時にはテング場に到着し、夕食の雑炊で疲れた体を温めた。夜のミーティングでは、みんなで納得のできる歩きができた充実感を共有し、翌日のファイナルツアーに向けて、メンバーそれぞれがお互いに思っていることを本音で語り合った。「明日もいい歩きをしたい」という程よい緊張感をもって眠りについた。

男子班は、5時に起床。テントやタープの撤収などは、これまで身に付けたノウハウを活かし、自分たちでテキパキと作業を進めることができた。しかし、ここでも共同装備の紛失が明らかになる。今度はコンパスである。目標の7時を過ぎてもなかなか見つからなかったため、テング場に到着してからまた探そうということになり、40分後に出発する。歩きのスピードは大変速く、ロードを終え山に入る頃には女子班に追いつく勢いだった。道のはっきりとしない谷沿いもぐんぐん登っていき、稜線へ。12時半前には小ピークに到着し、昼食タイムとなった。その後、上宇津根に向かって下る際にルートを見失い、危険なガレ場（石がごろごろとしていて不安定な斜面）に出してしまう。しかし、危険に直面したからこそより安全への意識が高まり、メンバー同士で声をかけ合い、今まで以上にまとまって歩くことができたようである。15時半頃にはテング場に到着し、再びコンパス探し。ここでも結局見つからず、何となく後ろ髪を引かれるような思いを抱えつつ1日の終わりを迎えた。班のミーティングでは、ファイナルツアーのコースの確認と意識付けに加えて、翌朝もう一度コンパスを探すこと、複数の目で徹底的に探し出すことなどが話し合われた。



子どもたちの就寝後、本部とインストラクターで明日の動きについて意見を出し合った。その中で、このまま十種ヶ峰のピークを目指して本当に意味のあるチャレンジができるのか。残りの日程のこともあるが、もう一度クォーツバレーに戻ることも含め、自分たちの装備を無くしているという課題に徹底的に向き合うことが必要ではないか。などの本部の思いを伝え、翌朝、子どもたちに「自分たちは本当はどうしたいのか」を、もう一度問いかける方向性を確認した。

7日目 ファイナルツアー「十種ヶ峰ピークアタック」

期 日：平成28年8月23日（火）

場 所：◇上宇津根奥～作業小屋～神角神社 泊

◇上宇津根奥～クォーツバレー～上宇津根～神角神社 泊

テーマ：覚醒の日（実行力と協調性）

【活動の様子】

今日は、いよいよファイナルツアーである。グループの様子は、それぞれ特徴があり、目標もそれぞれ違っている。しかし、飯ヶ岳に登ったときから、はるか遠くに見えた十種ヶ峰は子どもたちにとって最大の目標であった。長い道のりを経て、ついにピークアタックの日。天候にも恵まれ、山頂では360°のパノラマが子どもたちを待っているはずである。これまでの集大成ともいえるグループチャレンジがスタートした。

女子班は5時に起床、少し朝食をゆったりと取り、7時過ぎに出発した。

男子班は5時起床の後、コンパスの搜索を始めた。2人組で荷物の一つ一つをひっくり返してみたが、見つからないまま時間だけが経過する。結局、出発予定の7時半を大幅に過ぎたところで、今後の動きについてミーティングをもった。子どもたちは、「コンパスを落とした可能性のある位置を知っているのは自分たちなので、先に進むよりできることならクォーツバレーに戻りたい」という意思を全員で確認し合った。8時半前に上宇津根奥のテン場に主な荷物を置き、必要最低限の物だけを持って、クォーツバレーに向けて出発した。「何とかコンパスを見つけ出したい」という強い思いに突き動かされて黙々と歩き、9時半過ぎにはクォーツバレーに到着。朝食後、コンパスの搜索をスタートした。テン場として使った場所、ティップをした場所、トイレとして使用した場所、さらには高岳登山口からの下りで休憩をした場所まで登って、徹底的に探した。昨日、歩きは良かったのに達成感が十分に感じられなかったのは、コンパスを失っていることが気持ちに影響していたからであろう。ここまで戻って探すという行動につながったのは、自分たちの荷物を最後まで自分たちの責任で背負って歩きたいという強い思いがあったからに違いない。約1時間、探せるだけ探したが、残念ながらコンパスを発見することはできなかった。子どもたちからは、悔しさが滲む声も聞かれたが、「やれるだけのことはやった」、「こうなってしまったのは、みんなでチェックを十分にしていなかったから、みんなの責任」、「これだけ探して見つからなかったのだから、今後の行程やクリーンナップで挽回したい」というように、この失敗を学びとして次に生かしていこうという決意の声が聞かれた。この過程において、コンパスを持ち歩くナビ係の子のせいにする声は聞かれなかった。また、自分の責任が大きいことを痛いほど感じている係の子は、ルートに戻ってまで一緒に探してくれた仲間から心から感謝の気持ちを伝えていた。問題の原因を個々の責任にするのではなく、全員が問題に向き合い、チームの責任として受け止めることで、男子班には今までにないほど結束した雰囲気が出来ていた。

さて、ここからどうするかである。この時点で12時半を回り、もうこの日の十種ヶ峰ピークアタックには間に合わない。荷物のある上宇津根奥に戻って昼食を取っていたら、15時頃になるだろう。しかし、翌日には絶対に十種ヶ峰に登りたい。ここで、インストラクターから提案がされた。山に入ると途中で暗くなった場合、先にも後にも進めず安全が保障できなくなる。そこで、暗くなっても歩けるロードを回って、翌日のピークアタックのために神角神社まで進むのはどうかというのである。安全性を確保した上で、参加者の思いに寄りそうための提案である。子どもたちは、「これまでずっと山を歩いてきたのだから、最後まで山道を歩きたい」、「ずっと十種ヶ峰を目指して歩いてきたのだから、ロードを歩いてでもみんなで必ず山頂に登りたい」などと、それぞれが率直な思いを出し合いながら話し合いを続けていた。結局、13時前にクォーツバレーを出発し、上宇津根奥に

戻り、昼食をとることとなった。上宇津根に再び着く頃には、ロードを歩いて神角神社を目指すということで、全員の気持ちが一致していた。15時過ぎに上宇津根のテマ場を後にし、男子班は自分たちのルートをか強く歩き出していった。



一方、女子班は、7時過ぎに出発したものの、最初の小ピーク(518m)を通過したところで道を誤り、島根県側の斜面に迷い込んでいた。「迷ったときの基本は分かるところまで戻る」というインストラクターのアドバイスも受け、現在地と目指す方向の確認を幾度となく繰り返すうちに、何とか道を外す前の場所に戻ることができた。しかし、このときにすでに12時半を回っており、安全性を考えると十種ヶ峰山頂を目指すことは難しくなっていた。そこで、女子班も今日のテマ場を神角神社に変更することとした。県境から林道に変わり、作業小屋に到着したのが14時前。先発としてルートの安全確認をしていた本部スタッフ2名とも合流し、林道途中からヤマシャクルート(神角神社奥から十種ヶ峰を目指すルート)に出る斜面を、安全に気をつけながら下った。16時半、無事に神角神社に到着することができた。

夕食(スパゲッティ)をとりながら、ミーティングが始まった。いつものようにインストラクターからの話題提供ではなく、子どもたちが自ら話し合い始めた。「時間的には厳しいかもしれないけれど、みんなで次の日に十種ヶ峰に登りたい」「今日行くつもりだったが、行けなかったのは何がまずかったのか」「ルートをナビ任せにしてしまい、迷ったときにきつい言葉を言うてしまうことがあった」「焦ると言葉がきつくなってしまうので、相手に何かを要求するのではなく、自分はどうかということのように意識しよう」というように、自分たちの課題に向き合い、改善するための建設的な話し合いが進んでいった。最後に、個々のめあてを自分で守るだけでなく、他のメンバーがサポートしてくれる班のよさを確認し、ピークアタックのためのスローガンを決めて、就寝の準備に取りかかった。



男子班が神角神社に到着したのは、18時半過ぎだった。驚異的なハイペースである。夕方とはいえまだまだ厳しい暑さの中、ひたすら続く道のりを、みんなで歌を歌うなどしてお互いに気持ちを盛り上げながら最後まで歩き切った。後ろから離れて見守るスタッフも、子どもたちの歩きに見られる成長ぶりに嬉しい気持ちでいっぱいになったようである。子どもたちもスタッフも、疲れはあれど、晴れ晴れとした満足感あふれる顔で神角神社に到着した。夕食をすませ、「明日こそ、7時出発の目標を達成しよう」という強い決意を胸に就寝となった。

8日目「装備のクリーンアップ・ラストナイトミーティング」

期 日：平成28年8月24日(水)

場 所：神角神社～十種ヶ峰～十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場 泊

テーマ：決意の日(達成感と自信)

【活動の様子】

8日目の朝を迎えた。この日も天候は晴れ。午後から曇りの予報ではあったが、雨の心配はなさそうで、子どもたちのチャレンジを後押ししてくれそうな空である。この日は、

十種ヶ峰青少年自然の家に戻り、8日間お世話になった装備を感謝の気持ちを込めて磨き上げ、次の参加者が気持ちよく使えるようにするクリーンナップをすることになっている。12時山頂着という目標のもと、女子班・男子班ともに最後のグループチャレンジが始まった。

女子班は5時に起床。テキパキと朝食、パッキングを終え、出発。神角神社からまず北に向かい、十種ヶ峰の山麓広場から山頂を目指す神角ルートを選んだ。昨日の反省を生かし、途中で何度もみんなでルートを確認しながら、一歩一歩全員でまとまって歩こうとする姿が見られた。

男子班も5時起床。朝食、パッキングを終え、出発。これまで7時出発の目標を掲げながらなかなか達成できない日々が続いていたが、今日は7時前の上でピークアタックに向けて勢いがついたようである。男子班が選んだのは、神角神社からまっすぐ北東に進むヤマシャクルート。斜度もきつく、稜線に出る前にはガレ場（石がごろごろしている所）もあるため、大きな声で励まし合いながら登っていったようである。



この日、本部スタッフは山頂で子どもたちを迎えるため、9時過ぎから待機していた。最初に声が聞こえてきたのは男子班。おそらく稜線に出た辺りだろうが、ずいぶん遠くから聞こえてくるような声だったため、気合いを入れて声をかけ合っているのが感じられた。10時前、ついに山頂着。やりきったという誇らしげな顔で登ってきた子どもたちを、ハイタッチで迎えた。みんなで記念撮影をしたり、思い思いの言葉を叫んだりするなど、山頂到着の喜びをチームで分かち合っていた。

また、自分たちが歩いてきた飯ヶ岳、弟見山、高岳方面を確認して、これまでの歩みを振り返っては、8日間のチャレンジの重みを噛みしめている様子だった。10時半に下山を始めた。

女子班は、10時前、山麓広場をまとまって歩いてくる様子が山頂から見えた。段差の大きな階段が続く最後の道のりだが、みんなで「あげたこ」コールを叫び、苦しいはずなのに楽しそうに励まし合う声が山頂に届いた。その40分後に山頂到着。肩を抱き合って喜びを噛みしめていた。女子班も、記念撮影の後に、自分たちが歩んできた道のりを振り返り、これまでの日々に思いをはせていた。



キャンプ場に戻り、午後からはこれまでのチャレンジを支えてきた装備のクリーンナップである。今まで、多くの参加者のチャレンジを支えてきた装備に、『ありがとう』の気持ちを込めて、丁寧に洗ったり、乾かしたりして、また来年の参加者へと受け継がれていくのである。作業の途中で、8日ぶりとなる入浴もした。なかなか石けんが泡立たないほどに苦労や汗のつまった身や心を、温かいお湯でさっぱりとリフレッシュすることができた。夕食は、チラン寿司でのラストナイトディナーとなった。みんなでご飯を炊いて食事を作るのもこれが最後である。

そして、ラストナイトミーティング。このキャンプで生活を共にした仲間との最後の夜である。グループでの活動から、家に帰ればそれぞれ個人の挑戦がまた始まっていく。このキャンプでどんなことを感じたか、考えたかをじっくりと振り返る時間となる。初日から今日までの軌跡をたどり、自分の目標の達成度や、グループと自分自身の成長を確認し、仲間に対する思いやこれからの自分の生活についてしっかりと語り合っていた。いよいよ明日は旅立ちの日。個人ランが予定されている。現実に向かう出発点となる個人のチャ



レンジが待っている。

9日目「個人ラン・装備のクリーンアップ・懇談会・閉会式」

期 日：平成28年8月25日（木）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家キャンプ場

テーマ：新たなる旅立ちの日（自立と奉仕）

【活動の様子】

最終日も、快晴の朝を迎えた。プログラム全体を通して天候に恵まれていたが、最後まで今までの子どもたちのチャレンジと新たなる旅立ちを祝福しているような空となった。最終2日間はコンクルーディング・フェーズと呼ばれ、身体的・精神的な挑戦のクライマックスとして個人ランを行う。キャンプ終了後もキャンプの効果が持続するように、個人で体験の内面化を図る目的がある。

いつも通りの5時起床、朝食を済ませるとまずはクリーンアップの仕上げである。点検を受けて、それぞれの物品を倉庫にしまっていく。同時に、感想文を記入したり、バンダナにお互いのメッセージを書き込んだりと、班での残り少ない時間を味わうように過ごしていた。

8時半頃から保護者とインストラクターの面談も行われた。インストラクターは9日間の子どもの様子を具体的な出来事をもとに丁寧に保護者に伝えていく。話をする中で、子どもの成長を前向きに捉えていくことができるのである。我が子の頑張りに感動して、涙を流しながら話に耳を傾ける保護者の姿も見られた。

いよいよ、新たな旅立ちとなる個人ランである。これまでグループで活動してきたが、最後は個人での挑戦となる。競争ではなく、自分の決めた目標に向かってアップダウンの激しいクロスカントリーコースに挑戦する。これからの人生においても、自分で目標を設定し、自分の挑戦を続けてほしい。そんな願いがこめられている。仲間から直接励ましの声を受けることはないが、これまでともに過ごした仲間の存在を感じながら走ることが、自分の力になる。お互いに頑張る姿が、励みにもなる。

10時半、スタートの時である。じゃんけんをして、あいこになったらスタートする。急な下り坂もあれば、永遠と続くように感じる上り坂もある。登山道を思わせる急な坂道もある。その一場面一場面が人生そのものである。「歩きたい」、「止まりたい」、「休みたい」そんな気持ちになったとき、自分はどんな走りかしたかったのか、自分の目標に向き合っただけの次の一歩を踏み出す。こんな心の葛藤が帰ってからの日常生活へのシミュレーションとなり、一人でも頑張れる自信につながっていく。30分～1時間程度で全ての子どもがゴールした。走りきった後に、膝に手をつけて肩で息をする姿も見られたが、その表情にはやり遂げたという達成感が滲み出ている。これまでの8日間があったからこその見られる姿ではないだろうか。

個人ランが終わると、閉会式である。一つの円をつくり、自然の家の所長さんの挨拶の後、一人ひとりが



9日間を振り返り、キャンプで学んだことやこれからの目標などについて発表した。仲間について感じたことや考えたこと、本音で話し合う価値、みんなで物事を決めることの重み、自然のすばらしさ、困難なことでも仲間と協力してやり遂げた自信、当たり前の日常のありがたさなど、9日間で子どもたちの心に深く根付いたものが感じられる発表だった。

閉会式終了後は、自信に満ちた表情で、それぞれの家へと戻っていった。大きな荷物と何物にも代えがたい宝物を抱えて、子どもたちの新たなチャレンジのスタートである。今回獲得した宝物に磨きをかけるのも、新たに宝物を見つけるのも自分自身である。困難なことに出会ったとき、新たな挑戦だと思って、自分で自分の道を選び、チャレンジしてほしいと願っている。自分で選ぶことが、その結果の全てを自分で受け止めることにつながるのだから。